

〔資料紹介〕

高松宮家本「職人歌合絵巻」

神庭 信幸
小島 道裕

当館が所蔵する「職人歌合絵巻」一卷（高松宮家禁裏本（以下「高松宮家本」）。ホ函一二三）は、中世職人歌合絵巻の一作品としてよく知られているが、資料自体についての検討と紹介はこれまで必ずしも十分に行われてきたとは言い難い。^①また、この作品は汚損がかなり激しく、画像を十分に判読できない状態であつたため、このほどこの汚損を軽減させた状態を想定し、ある程度復元的な手法を用いた複製品を製作した。そこで、復元的作業の根拠とするために行った調査で得られた所見を中心に、検討の結果を報告しておきたい。

この高松宮家本「職人歌合絵巻」は、「建保第二（一二一四）の秋のころ東北院の念仏に……」という序文を持ち、五番の歌合からなる「東北院職人歌合絵巻」五番本の一写本である。五種類ある中世の職人歌合の中でも最古の作品とされるこの系統に属する写本は、曼殊院本（現東

京国立博物館蔵）、高松宮家本、それに近年紹介された「東北院職人歌合五番本色紙形貼交屏風」（以下「貼交屏風」）の三点が知られ、原祖本は存在せずいづれも写本であるが、曼殊院本と後二者は画像がかなり異なり、明らかに祖本が異なる。また、曼殊院本と「貼交屏風」が一部に彩色を施した程度なのに対し、高松宮家本は全体に彩色があり、もつとも華麗である。製作年代は、曼殊院本は詞書が花園院の筆で正平三年（一三四八）以前、「貼交屏風」は詞書が三藐院近衛信尹で慶長一四年（一六一四）以前とされるのに対し、高松宮家本は筆者・年代共に定説を見るに至っていないようだが、一般的には室町末期の作とされており、ここではこれに従っておきたい。^③ただ、伝来から見ても高松宮家本が天皇家を中心とする宮廷社会の中で製作されたものであることはほぼ間違いないく、後述するような贅沢な色使いや、画像が極めて繊細・巧緻であることもその故と考えてよいであろう。

法量は縦二八・七cm、横六七五cm（本紙のみ）、一六紙からなり、一紙の横は第一六紙を除いてほぼ四三cmである。現状は卷子装で錦地の表紙と金銀箔散しの見返しが付けられているが、題箋・奥書等はない。

前述のように、全面に汚損があり、薄黒い茶色になっている。煤状の粒子が、紙の繊維の中まで入り込む形で大量に付着しており、過去に実施された修理に際して、無理にこれを除去しようとしたためか、刷毛目状のムラができ、また一部では墨・彩色や料紙までこすり取られて、表面の繊維の一部が部分的に寄ってしまった箇所もある。

このため、多くは淡彩で描かれている画像がかなり見えにくくなっており、画像の色自体も、はたして本来の色なのか、それとも汚れを被ったために変化した色なのか判別したい状態である。この点については詳しくは後述するが、本資料が中世の職人の画像として有名であり、展示等に利用されることも多いことを考えると、画像の形を見やすくし、また色彩も本来の色がわかる状態にすることが望まれた。

そこで、原本の状態も考慮して複製品を製作することとし、以下の要領で着手した。

・まず、顔料の同定の参考とするためにX線による撮影を行い、また顕微鏡によって原品の詳細な観察を行い、描写と彩色、および汚損の状況を把握した。この作業は顕微鏡画像を一方でビデオに録画し、復原作業の参考とした。彩色の分光反射スペクトルも測定し、彩色復原の推定の助けとしたが、顔料を特定するための蛍光X線分析あるいはX線回折分析は今回は実施しなかった。

・複製の仕様は、現状複製ではなく復元の作業を伴うため、手彩色とした。まず全体を全紙判カメラで原寸大撮影し、料紙の上に薄くコロタイプ印刷して形を出し、その上に日本画の要領で筆で色を付けていく方法であり、色調・色の濃度・画材などについては希望通りに行うことができる点がメリットである。

・複製は、完全な復元ではなく、汚れを軽減させて形と色を現状より明瞭にする程度にとどめた。一部欠失している部分もあり、また汚れと

彩色を完全に区別することも困難と判断されたためで、現実には困難な、汚れのある程度除去した状態を想定しての作品とした。従って、料紙がこすられてできた傷などは、それとわかる形で表現している。

およそ以上であり、完全な現状複製でも復元複製でもない複製は通常は行わないが、今回は資料の状況の特性と目的から、あえてこのような方法を採用した。結果としては、展示資料、ないし説明用の資料としては、比較的違和感の少ないものができたのではないかと考えている(写真52に一部を示した)。

以下、画像の一点づつの特徴および検討結果を紹介してみたい。

1 医師(写真1～9)

正面に天秤で薬を量る男、右側に薬研をかけている男。X線には唇・朱色の下着・衣服の青色の紐・天秤の青色の紐および金色の皿・文箱の金色の模様および金色の水差し・濃い赤色の薬・黒い皿の杓・手前の桶の朱色の部分などが写っている。顔や文箱の描写には、濃淡二種類の墨が使い分けられている。頬などには薄く赤が入っているが、粒子はよく見えない。正面の男の衣服の色は顕微鏡でも判断は難しいが、本来現状に近いウグイス色だったと判断した。衣服の裾がかがっている紐は、肉眼では緑色に見えるが、墨線の上に岩群青と考えられる青色が塗られている。薬研をかけている男の衣服の地色は青色とも緑色とも見え、模様は青色と白色で描かれている。

金属顕微鏡による観察（200倍）では、正面の男、薬研をかけている男の衣服は共に、極微粒の濃青色の顔料粒子が存在し、それらは明らかに紐や模様を表した青色顔料とは異なって見える。おそらく藍であろうと考えられる。正面の医師の衣服には黄、橙、赤色の粒子も多数見えることから、衣服はウグイス色に近いものであったと考えられる。両方の衣服の地色の分光反射スペクトルの曲線は似ている。

天秤の皿を吊す紐も墨と青で描かれている。手前の葉は茶色に見えるが朱と墨の点描、天秤の分銅と皿および文箱の水差しと文様・黒い皿の中の杓は金であり、これは「貼交屏風」でも同じ所に金を用いられている。手前の桶は水銀朱と考えられる赤色と濃い墨で描かれ、部分的に擦れによる欠損が見られる。

2 陰陽師（写真10～11）

台の上に三つの御幣を立てた三宝を載せ祈禱する男。三宝の上の供物の皿・左の灯明・手前の皿には朱色を用いられている。また、三宝の上の皿・曲物の中・御幣には白色を用いられている。台は薄赤い彩色。男の持つ御幣と衣服には彩色がなく、紙の地色のままである。X線では点描の供物の朱と白色の部分が写っている。

3 鍛冶（写真12～15）

焼けた鉄を前に向き合って槌を持った男二人。左側の男の緑の衣服・赤くなった墨・赤くなった刃物はX線に写っている。奥にフイゴ、手前

に墨俵とヤスリなど。槌は薄墨。右側の男の上着と左側の男の袴の水色は拡大してもやはり青色に見えるが、粒子はよくわからない。右側の男の袴は朱色と墨の粒子によって茶色に見えている。左側の人物の腰の衣服は岩緑青と考えられる鮮やかな緑色である。顔と体には赤みと立体感を表す限取りが見られる。手前の木（？）の上に黒いコ字形を付けた道具の部分には、白い下地が見られる。補彩のための下地と考えられ、他にこのような下地は見あたらない。淡い青に見える右側の男の上着の地色の分光反射スペクトルは、医師のものと類似している。

4 番匠（写真16～19）

指金を木材に当てる男と箱にもたれてこれを見る若者。奥に木材、手前に槌・墨壺など。X線では右側の若者の衣服の青色部分と腰に見える白色の帯が写っている。若者の衣装の青色部分は顔料粒子が粗く、白色の模様は青色の上に彩色してある。左側の男の袴は水色に見えるが、やはり粒子がわからない。分光反射スペクトルは医師のものに類似。模様は青色である。上着は淡い赤茶の地色に、赤色と墨を用いた茶色の模様。

5 刀磨（写真20～23）

刀を研ぐ男一人。奥に桶、手前に槍と長刀の穂先、砥石と紙の入った箱。刀を研ぐ左手の下からは水がながれている描写がある。刀の刃の部分は、いずれも銀色に光って見える。薄墨の上に銀色のものを塗ってあるように見え、長刀の刃先には絵具が玉状になっている。X線では写ら

なかったため、金属ではなく細かい雲母の可能性もあると考えられる。

X線に写っているのは衣服の濃い青の部分だけである。衣服の淡い青色の地色の分光反射スペクトルは医師のものに類似している。

6 鋳物師 (写真24→28)

上から吊された縄につかまって足踏み式のフイゴを踏む男二人。縄は黄土と茶。右側の炎の加減を見る男の目には両目ともに白目が塗られている。X線では火の粉と袴の青色の模様が写っている。二人の男の上着はともに白色で塗ってある。右側の男の袴の模様は鮮やかな青色顔料で描かれ、所々に擦れて剥落した箇所があり、下の紙が見えている。淡い青の袴の地色の分光反射スペクトルは、医師のものに類似している。

7 巫 (写真29→33)

鼓を持つ女一人。X線には白い数珠玉・緑と朱色の衣服・衣服の上の模様・鼓の紐が写っている。額には白、衣服の隈取には白と朱色、また緑と朱色の衣服の上には金で模様が描かれている。鼓の紐は青色で描かれている。鼓の皮の部分は薄く朱色を帯びている。緑色の衣服の上に描かれた厚塗りの白い数珠玉は剥落している。

8 博打 (写真34→36)

賽を投げる男一人。X線には双六の白い石が写っている。襷には白を塗っている。賽の中にも白が塗られている。双六の白とこれらの白とは

材質が異なり、前者が鉛白、後者が胡粉の可能性がある。

9 海人 (写真37→42)

薪を担ぐ男と小屋の中で塩を焼く男。X線では男の白い帯・破風の枝・左側の男の衣服の模様・右側の男の衣服の模様が写っている。竈には白色が塗られおり、海の波には剥落が多いが厚塗りの白が塗られている。小屋の破風の部分には、枝の付いた木の葉が金で描かれている。肉眼では見えにくくなっているが、X線では明瞭に写ったため判明した。「貼交屏風」でも、写真ではややわかりにくいのだが、やはり同じ部分に金を用いられているようである。

左側の男の衣服は青みを帯びており、高倍率の顕微鏡観察(200倍)では青色の微粒子が見える。藍と考えられる。左側の男の衣服の地色分光反射スペクトルは医師のものに類似している。青色の模様は粒子の粗い顔料で描かれている。右側の人物の衣服の地色は朱色の顔料と墨とによる茶色で、模様は墨の輪郭の中に濃い赤で彩色してある。

10 賈人 (写真43→49)

荷物を背負い腰を下ろした男一人。水色の衣服には、剥落が激しいが、白で模様が描かれている。X線では脚絆のみが写っている。水色に見える衣服の分光反射スペクトルは医師のものに類似している。脚絆には青い顔料が用いられ、一部剥落している。膝の部分の衣服には黄色の彩色がある。

11 経師（写真50・51）

版木に紙を当てて刷る男と表紙を付けて巻物を作る男。X線では左側の巻物およびその紐が写っている。左の男の傍らの小刀には、銀色のような光沢を持つ彩色が施されている。また、糊を入れた容器には「貼交屏風」では金が塗られているが、ここでは彩色が施されていない。墨を入れた容器の中の杓は茶色で、医師のところで金を用いていたのとは異なる。赤みを帯びた箱と版木には、朱色と墨を混ぜた彩色が施してある。巻物には白で紐が描かれている。青みを帯びた右側の僧侶の衣服の分光反射スペクトルは医師のものに類似している。

以上、彩色の特徴をまとめると次のようになる。

- ・X線の透過率から判断すると、白色には二種類の顔料が使われていると推定できる。それらは鉛白と胡粉ではなからうか。
- ・黄色の表現は、鋳物師のフイゴの紐と商人の膝部分の衣服の黄色が黄土と考えられる顔料を使用しているのを除き、金色の金属を用いている。おそらく金泥であろうと考えられる。
- ・粗い青色顔料および緑色顔料はX線が透過しにくいので、天然の鉱物顔料である岩群青および岩緑青であると考えられる。
- ・朱色には水銀朱が用いられており、他の顔料はないように考えられる。
- ・茶色は朱色と墨の混合によって表現されている。
- ・銀色に光る刃物の表現は、銀によるのではなく、雲母などの透明で艶

のある顔料と墨とによって表現されていると考えられる。

・衣服の彩色が青か緑か不明瞭な部分は、拡大観察から青色顔料によって主に構成されているが、そこに加えられる黄や朱色の顔料によって緑色を帯びたように見え、青色顔料は微粒の藍であると考えられる。商人の衣服は肉眼では明らかに青みを帯びており、その分光反射スペクトルと他の衣服のスペクトルとはほぼ同じ形をしている。従って、衣服の色は薄い藍色の色調を帯びているものと考えられる。

- (1) カラー写真は「古美術」七四（一九八五）に六点が掲載されているが、極めて色調が悪い。
- (2) 岩崎佳枝「個人蔵 東北院職人歌合五番本色紙形貼交屏風」（「古美術」七四（一九八五））。この他、断簡にフリーア美術館本があり、高松宮家と同系統の祖本、同時代の作品とされている。（森暢「職人歌合絵巻について」（前掲書））。
- (3) 詞書筆者を後陽成天皇の弟八条宮智仁親王（一五七九～一六三九）の可能性があるとし、年代を江戸初期まで下げる見解もある（岩崎佳枝「職人歌合―中世の職人群像」（一九八七年）、平凡社）が、ここでは従わない。

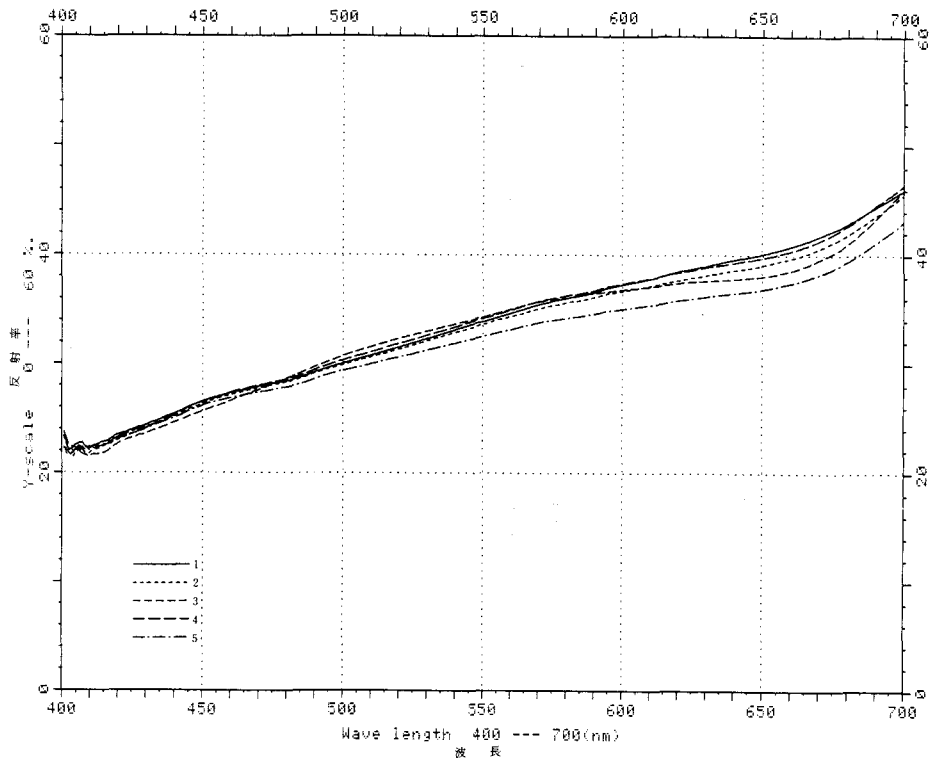


図1 青みを帯びた衣服の分光反射スペクトル

1 医師 (左の男), 2 医師 (右の男), 3 鍛冶 (右の男), 4 番匠 (左の男), 5 刀磨

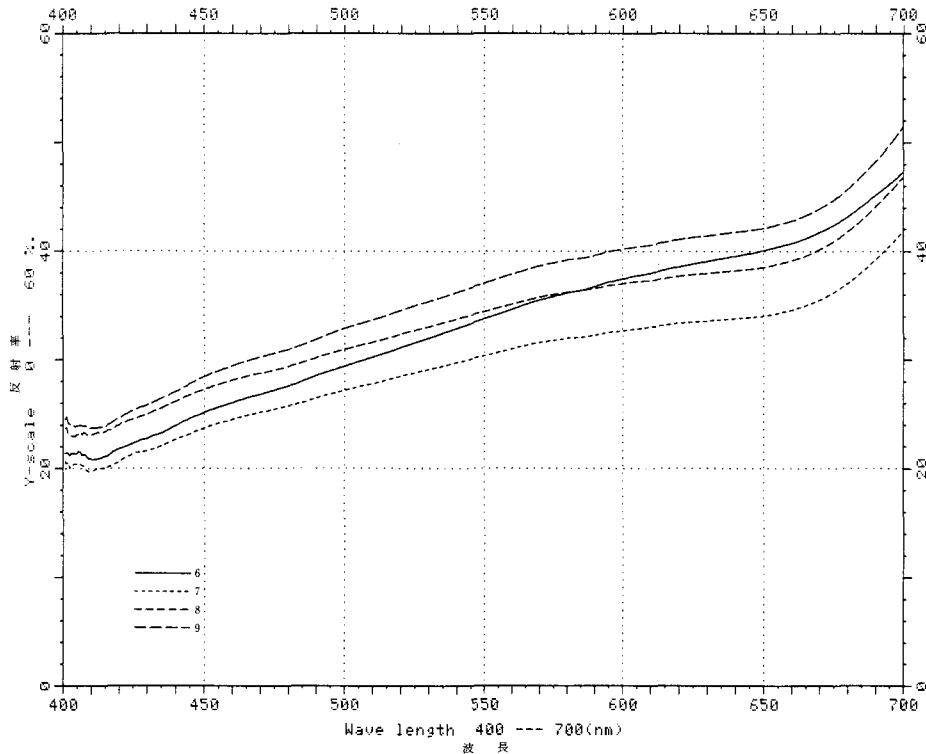


図2 青みを帯びた衣服の分光反射スペクトル

6 鋳物師 (右の男), 7 海女 (右の男), 8 賈人, 9 経師 (右の僧侶).

△詞書釈文▽

建保第二の秋のころ、東北院

の念仏に九重の人々男女た

かきもいやしきもこそり侍りし

に、みちくの者とも人なミくに

いまいりて聴聞し侍けるに、時し

も九月十三夜の月くまなかり

けるに、ころある人は哥をよみ

連歌なとしてころをすまし遊

けるに、うらやましとやおもひけ

む、道々の者とも心をすまして

あそひけるに、月やうく山端に

入なんとするおりふし、をのく

こよいのなこりこそなくさめ

かたく侍れ、かくて八雲の煙立は

なれなは、何事をおもひ出に

せむ、我も人も心の色をあらは

して水茎のなかれ世のかたみに

せむとて歌合をすめける、

題

月恋

作者

左 右

医師 陰陽師

鍛冶 番匠

刀磨 鋳物師

巫 博打

海人 賈人

判者

経師

一番

左 (医師)

むら雲のかゝれる月の薬には

よはのあらしそ成へかりける

きみゆへにころとつけるやせ病

あはぬつきめに灸治してミむ

右 (陰陽師)

再拝やたかまの原にすむ月に

あまの八重雲かゝらすもかな

おもひあまりきみには鬼氣の祭して

しるしもミへぬ御神楽そうき

月

左のあらしめつらしくとりよせて

こゝろ詞ともにいひしられて侍り

右の哥初の句耳にたちて

侍、たかまの原といふすゑに

あまのやへくもとむすはれたる

やまひにや、されは左勝、

恋

左右いづれも興にきこえ侍、判

者をよふ所にあらず、何勝と定

かたし、ふたりの男をわきかねて

生田の河に身をなけし女の

こゝちして、

二番

左 (鍛冶)

月にねぬやとゝや人のおもふらん

いつもたえせぬあひつちの音

あふことハやかてたかねのはかみ草

いさゝは人をおもひきりてむ

右 (番匠)

すみかねのなをりをたゝす身なれとも

かたふく月にかうはりそなき

あはむとハ下かためせし君なれと

また半作の恋をするかな

月

左なたらかに侍り、但大かたの宿

ならひによまれたり、右詞つゝき

よろしく侍り、かたふく月とよま

れたるいかゝ侍らん、月の言をは

盛によむへきとそふるき哥

合にに^(あは)申たる、これかれなそ

らへて持にや侍らん、

恋

左の哥なたらかに侍り、但いさゝハ

人をおもひきりてむと心にまかせ

られたるこそ耳に立て侍れ、

恋ははてなしとこそふるくも

申ならひたる事にて侍れハ

聞にくゝ侍り、恋のこゝろハうすく

侍れと、いますこし左ハまさると

申へし、

三番

左 (刀磨)

我やとの砥水にやとる月かけの
あやしやいかにさひてみゆらん
きミゆへにきもゝこゝろもときはてゝ
わか身ひとつそきえなかりける

右 (鑄物師)

月かけをもゝ度みかくあらし哉
これやますみの鏡なるらむ
とふ人を待とせしまにまかねふく
きひの中山跡たえにけり

月

右の歌便いミしくとりよられたり
此歌楊州の百練鏡の事を
思てよろしく侍とも心の中い
ますこしおもひ入たる所

恋

左さしたるなんなし、右ふる
き事をめつらしくとりな
されたり、持にや、

四番

左 (巫)

ひくしめのうちへな入そ夜はの月
さはかり雲のこゝろゆかぬに
きミとはれ口をよせてそねまほしき
つつみもはらもうちたゝきつゝ

右 (博打)

おほつかなたれにうちいれて月影の
くもの衣をぬきていつらん
我恋はかたおくれなるすくろくの
われても人にあはむとそおもふ

月

左右ともにゆうにきこえ侍り、右今
すこし我身に思しられたる所
あり、右勝にや侍らむ、

恋

左恋のこゝろあさからず、右たよ
りおもしろく侍り、持と申へし、

五番

左 (海人)

月をみてさても過へき身成をは
あきはもしほの煙たてしを
逢事ハかたしくなみのうき枕

うらみぬ袖はぬるゝものかは

右 (賈人)

とまやもる家路の月を捨てきて
むかしもかくや世をわたりけむ
いのちにも身にもかへんとおもへとも
あふことをうる人のなきかな
月

左歌こゝろ詞ともにいひしらて、哥
なとはかくこそよまゝほしけれ、
たれの人そとこゝろの中おもひ
しられて心にくゝこそ、右歌尋
陽の江の月を存せられたり、
まことに青嵐更月の扁舟の
うちおもひやられてあはれに
きこえ侍り、但歌すかたもし
ほの煙たちまさりて侍り、

恋

左のうたいかにしていき侍
けるそや、世の末にはありかた
くこそ侍れ、右の歌、題ハたし
かにみえてこゝろこと葉をよふ
へくも侍らされハ、左勝にや、

判者

経師

いまさらになにさやけしとおもふらん
すりかた木なる秋の夜の月



写真12 鍛冶



写真16 番匠



写真20 刀磨



写真24 鋳物師



写真29 巫



写真34 博打



写真37 海人



写真43 賈人



写真50 経師



写真52 巫（複製品）

顕微鏡写真の倍率は誌面上での倍率を表わす



写真2 唇(x5.1)



写真3 医師の衣服の紐(x5.1)

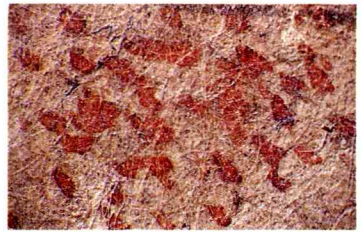


写真4 葉(x5.1)



写真5 天秤の分銅(x3.8)



写真6 天秤皿(x5.1)



写真7 水差し(x5.1)

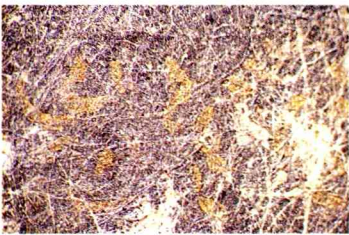


写真8 文箱の模様(x5.1)

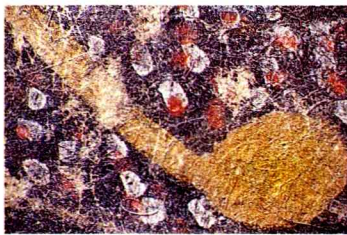


写真9 桶の中の杓(x5.1)



写真11 御幣の白い紙(x3.8)



写真13 左の男の緑の衣服(x10.2)



写真14 右の男の襟元(x3.8)



写真15 木材に打ち込まれた金属の杵(x5.1)



写真17 右の若者の左肩(x5.1)



写真18 左の男の上着の模様(x5.1)



写真19 左の男の袴の模様(x5.1)

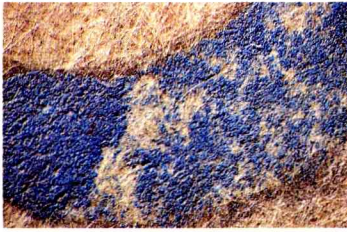


写真21 青の下着(x5.1)



写真22 刀の手元(x5.1)



写真23 刀の刃先(x5.1)



写真25 右側の紐(x5.1)

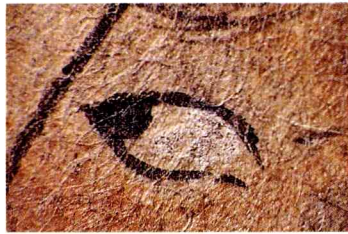


写真26 右側の男の目(x5.1)

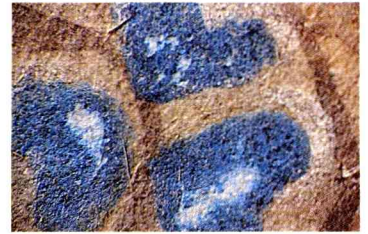


写真27 右側の男の袴の模様(x5.1)

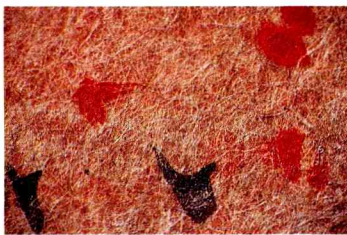


写真28 火の粉(x2.8)

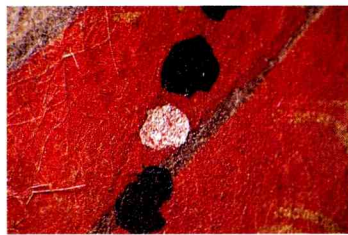


写真30 左胸元の数珠(x5.1)



写真31 左胸元の模様(x5.1)



写真32 右胸元の剥落した数珠(x10.2)



写真33 鼓の紐(x3.8)



写真35 賽(x10.2)



写真36 双六板(x3.8)



写真38 左側の男の衣服の模様(x5.1)



写真39 破風の木の葉(x5.1)

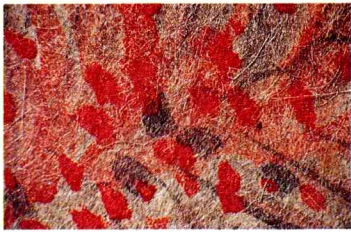


写真40 炎(x3.8)

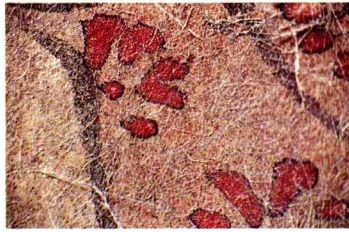


写真41 右側の人物の衣服の模様
(x3.8)



写真42 所々に剥落がある海の波
(x3.8)

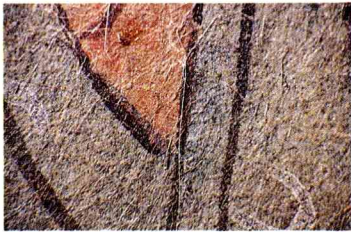


写真44 白い模様が見える衣服
の胸元(x3.8)



写真45 脚絆の脛の部分(x5.1)
└—天



写真46 脚絆のくる節の部分。
└—天 剥落がある。(x5.1)



写真47 黄色の袴の膝の部分
(x10.2)



写真48 赤茶の上着の腕の部分
(x10.2)

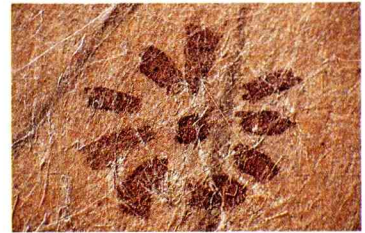


写真49 風呂敷の模様(x5.1)



写真51 巻物の紐(x5.1)